

日本的自然観の効能

近代社会は、人間讃歌を精神とし、例えば「人間の偉大さに較べると山の高さは一尺もない」という言い草に代表されるように、人間万能の思想を打ち立ててきました。

しかし、科学、技術の発展が招いた今日の環境危機は、人間がその能力の限界を重く自覚しなければならぬことを示しています。

人類は、生物進化の頂点に立つ万物の霊長ですが、三十数億年かけてつくられてきた地球生命系の一員であって、他の生命と密接不可分に結びついて存続しているというのが現代科学の知見でもあると思われます。

万物の霊長は、自分のことだけでなく、全体の生命系を考えるべき立場にあります。かつて人類はこうした自然の万物を、その中に神や魂が宿っているとさえみなし畏敬してきておりました。

しかし古代都市文明以降の合理主義の思想は自然を支配の対象とみなすようになってきたと考えられます。近代以降の産業社会では自然の収奪はとどまらないものとなりました。

日本では、古くからの自然信仰が根をおろしたまま、その後の思想体系によっても殆ど変更されることなく、歴史が経過したという特有の事情があります。

その自然は、ときに地震や台風など猛威を揮う人智を超えた存在です。他方、平時は穏和で生命力あふれた恵みの大地であり、日本人はそれと解け合って暮らしてきました。そして万葉から俳諧に至る詩歌などに見られるように、霊妙な自然と感性豊かに交歓して品性を磨いてきたのです。

1922年に日本を訪れたアインシュタインは、「日本人が生活における芸術的姿、謙虚さ、精神の純粹さ、穏やかさという世界に優れた資質をもっている」ことに注目しました。

生命系の全体をなす自然を尊重し自然と一体になった暮らし方が多分にこの資質形成に寄与してきたと考えざるを得ません。都市化の進みにつれこの伝統的な自然観も薄れる傾向にありますが、まだ私たちは、期せずして、「自然の叡知」という発想ができるような状態にはとどまっています。

そして日本は現代最先端の科学技術を有しています。つまり私たちは、心根においても、力量においても、地球を守るために世界で指導的役割を果たすべき地位におかれているといえるでしょう。京都議定書採択地という名誉ある地位も占めています。

皆様方はすでに環境保全のために先進の役割を果たしてこられました。しかし問題は時間との闘いです。自然が消滅し尽くす前に、気候変動によって早くも今後一世代のうちに、世界的に社会のアナーキ状態が出現するという予想もあります。お互いに競い合って一層の奮闘を致したいと存じます。

(06.05.26 社団法人 ぐらしのりサーチセンター 総会パーティあいさつ)